

令和5年度 第5回「部活の未来を考える会」会議録

会議名	令和5年度 第5回「北九州市部活の未来を考える会」
会議種別	市政運営上の会合
日時	令和5年11月21日（火）15時30分～17時00分
開催場所	小倉北区役所東棟8階812会議室（北九州市小倉北区大手町1番1号）
出席者	<p>[構成員] ※ 50音順敬称略 岩谷 かおり、上村 英樹、倉本 京子、児島 誠、下田 功 新谷 麻美、園山 浩、高田 俊也、中附 博美、林 昭裕、 松井 清記、森川 正和、和田 正人</p> <p>[事務局] 教育次長、学校教育部長、特別支援教育担当部長ほか5名</p>
次第	<p>1 教育委員会あいさつ</p> <p>2 議事 (1) 事務局による意見の取りまとめについて</p> <p>3 諸連絡</p>
会議経過 (発言内容)	<p>1 教育委員会あいさつ 【教育次長】 これまで、「少子化時代における部活動存続のための対応」或いは、「休日の部活動のあり方」、「指導者の確保」というテーマで議論をいただき、各団体の皆様に貴重な意見をいただいた。本日は、これまで各委員よりいただいた意見をもとに、教育委員会事務局としてまとめたものをお示しする。具体的な内容として、「現在、各学校で行われている部活動を持続可能な状況にサイズダウンをしていくこと」、「休日の部活動を段階的に地域へ移行すること」、「学校部活動から地域の活動へスムーズに移行することを目指して制度設計をすること」などを盛り込んでいる。事務局のまとめに対してご意見をいただき、次の会議では、北九州市における部活動地域移行の大枠の案についてまとめさせていただければと思っている。</p> <p>○ 会議資料確認</p> <p>2 議事 ○ 公開非公開 【座長】 原則通り公開ということでよろしいか。 (承認)</p> <p>(1) 事務局による意見の取りまとめについて 【事務局】 本日は、北九州における活動地域移行の大枠を案としてお示しする。基本的には、これまで議論いただいた内容まとめたものである。 1つ目は、「少子化時代における部活動存続のための対応」である。生徒数</p>

の減少と、部活動を担う顧問教員の確保の観点から、拠点校型部活動を導入したいと考える。具体的には、「複数校で部活動を運営するなど、単一校ではなくエリアで活動すること」、「モデルからスタートし、数年かけて全市へ展開をしていくこと」、「拠点型に整備しつつ、地域移行、または、地域連携を模索していくこと」である。これらを導入することによって、部員数の確保、指導者の確保、場所の確保等が見込まれるかと考える。

図は、12の種目を3校で運営するイメージである。今後、モデル校を立ち上げ、学校行事との兼ね合いや、平日の移動の手段など、拠点校型部活動を導入した際の課題を洗い出したいと考える。

2つ目は、「休日部活動の在り方」である。教員の負担軽減と、国の示すガイドラインに則り、休日の部活動を地域の活動へ移行したいと考える。具体的には、「まずは休日の部活動から、地域へ移行すること」、「数年かけて段階的に地域の活動へと移行すること」、「兼職兼業に関する基準等を整備し、指導を望む教員の活動の機会を確保すること」である。休日の部活動を地域の活動を移行することで、地域の活動を推進するとともに、教員の働き方改革に繋がることが見込まれる。

図は、休日部活動が地域移行されるまでのイメージである。まずは月に1回程度、土日を完全休養する週を設け、徐々に拡大していく。その間、地域クラブや人材バンク等の制度を整備し、部活動地域移行の意義や内容を周知したいと考える。また、休日も活動が完全に地域移行された際は、地域クラブ等が活動を担うことが想定される。そのため、北九州市では、令和4年度からモデル事業を行っており、「委託型」、「地域クラブ型」の検証をしている。

3つ目は、「指導者の確保」である。

まず、指導者の数及び質を確保するため、指導者の登録制度を整備したいと考える。具体的には、「人材バンクのような登録制度を整備すること」、「登録された指導者を学校部活動や地域クラブ等の求めに応じて紹介すること」である。将来的には、指導者を一括して把握することで、研修制度や資格の取得等、質の担保が可能になると見込まれる。

次に、受け皿となる団体等を確保するため、団体に関する登録制度を整備したいと考える。具体的には、「地域クラブ活動に該当する団体の登録制度を整備すること」である。ガイドラインに基づいた活動をしていることや、一定以下の会費を設定するなどの基準をクリアすることを条件に、地域クラブとして認定することで、受け皿となる団体の確保が見込まれる。また、学校施設の使用や学校での周知を可能にするなどを検討し、付加価値を付けることで、受け皿となる団体が確保できると考える。

最後に、生徒や保護者はもちろん、地域や関係団体の理解と協力を得るために、部活動、地域移行や地域クラブについて周知したいと考える。具体的には、「部活動地域移行の方向性が決まり次第、各種説明会を開催すること」、「生徒・保護者等に向けて、地域クラブを周知すること」である。将来的には、学校と地域が協力し、中学生の活動を支えることで、北九州市全体でスポーツ・文化シーンを盛り上げることに繋がることが見込まれる。

図は、人材バンク・地域クラブの登録制度のイメージである。学校だけでなく、地域クラブや保護者等が主体となって活動する団体等が立ち上がった場

合にも指導者の紹介が可能と考える。また、登録制度を用いることで、生徒、保護者にとっては、活動内容の保障となり、また、各地域クラブにとっては、学校施設の利用や学校を通じて周知を行うことができると思う。

令和6年度にモデル事業や周知の期間、制度設計を行い、3年程度かけて本格実施したいと考える。事務局による意見の取りまとめは以上である。

【委員】

いくつか質問させていただきたい。

まず、拠点校型について、校数の違い等があるため、区によっては実施が難しいことも予想される。拠点校型でも顧問の確保が課題にはなると思う。地域移行がスムーズに進み、人材が確保できればいいが、できない場合は人事異動も考慮していくのか伺いたい。

次に、部活動に関して、校区外申請が認められている市町村も多数ある。拠点校型と共に、校区外申請をどのように取り扱っていくのか具体的にあれば伺いたい。

そして、兼職兼業について、具体的な基準等があれば伺いたい。

今後、人材がどのくらい確保できるかは、区や地域によって温度差がでると感じている。本校でも、顧問の確保に苦慮している状態であり、専門の先生というのはほとんどいない。例を挙げると、本校の男子バレー部は、80人程度の部員がいるが、専門の顧問がおらず、新採の先生や講師の先生に担ってもらっているのが現状である。

このような難しい状態であるため、週3日しか活動しない部活動などがあってもいいのではないかと考える。

また、今後、地域移行を進めるにあたり、適宜、校長会にも情報等を伝えていただき、連携しながら進めたいと考える。情報を職員に伝える等、見通しを持つことで、スムーズに進むこともあると考える。

【事務局】

令和6年度は、拠点校型モデルとして、数校で実施したいと考えている。その中で出てきた課題について解決していきながら、徐々に広げていきたい。

特に、顧問の確保については、顧問がどれだけ配置できるか、また、できないかというところの検討と、外部の人材をどう活用できるのかを検討したいと考える。

また、他都市の情報としては、静岡県静岡市で拠点校型を導入している。このような動きも把握しながら検証していきたい。

そして、兼職兼業については、現在実施しているモデル事業の中で、小学校の教員に、団体に加盟してもらい、兼職兼業の許可を得て、指導に従事してもらっている。今後、教職員課と協議しながら、兼職兼業の許可のあり方についても検討する。

【委員】

部活動の指導を望む中学校教員が、指導することは可能なのか。

【事務局】

モデル事業は、小学校教員であったが、中学校教員も兼職兼業の許可を得て、団体等に登録していただければ可能と考える。その際、労働基準法の示す基準の時間を超えないようにする必要はある。

【委員】

少子化に関しては、地域によって部活動の数や生徒の数が違うため、合同部活動や連携部活動、拠点校型も含め、合わせてやっていくしかない。しかし、今後、部活のあり方や体制は変わる可能性があるため、ここでの提案、今回作る一つのモデルがベースになり、毎年のように変わっていかないと、追いつかないと思う。

それから、休日は切り離すというのが国の方針でもあるため、まずは、休日から地域移行する方向がよいのではないか。

指導者の確保については、人材バンクという形で提案されているが、教育委員会が、人を集めると言って簡単に集まるものではない。また、集められた指導者に、「この学校行ってください」と言っても、学校からすると、誰かわからない人が来たら困るのではないか。

休日の部活動のあり方と、それから、兼職兼業を含めた指導者の確保の方法について、この提案をもとに広がっていくと感じている。

【委員】

部活動の地域移行については、5年前から調査をしている。岐阜県などに調査に行った。調査の結果、地域によってやり方は異なるが、PTAが団体を組織し、指導者を雇用しているところなどがあつた。

実際のところ、解決できる課題と解決が難しい課題があり、先生の働き方や兼業兼職については、教育委員会でしっかり話をしていただければ、ある程度答えが出てくるものだと思う。しかし、地域とうまくやるということになると、一朝一夕ではいかないと感じている。

今年度、日本スポーツ協会が、全国のクラブの登録制度を始めた。しかし、登録を進めるクラブはごくわずかである。自分たちがスポーツをするためにクラブを作ったのに、登録費を払ったり、その他様々なことをしなければならなかったりするため、登録はしないという考えのクラブが非常に多い。北九州の総合型スポーツクラブとしても、私のところ以外は、手を挙げるところはないという状況である。かなりの労力をかけるつもりで、教育委員会も臨まれた方がいい。

モデル事業に関して、指導者は、少しでも子どものためにという思いで指導している。しかし、指導者の派遣となると、どんな人が来るのかわからず、その中でその取りまとめができる体制をとっておかないといけない。そういった研究も今後、実施していただきたいと思う。

学校や教職員に関する課題と、地域との繋がりなどの課題を、同時並行で行わなければならない。教員がOKとなっても、受け皿がないということになると、今までと全く変わらないことになってしまう。

【委員】

人材バンクとか地域クラブ活動の団体登録は、どこが行うのか。

【委員】

おそらく人材バンクの管理の仕方というのは、部活動指導員のような登録制度になるのではないか。地域の頼みやすい人に頼むのが現実的である。それでも人材がない場合は、教育委員会に依頼するとか、繋がりの中から探して登録してもらうとかいう方法になるのではないか。最初に名簿があり、そこから振り分けていくというのは、全国的に見ても不可能であると感じる。指導に関して、一定の指導力や社会的責任を負える人でないと、学校やクラブ、保護者は、任せられないと感じるはずである。まずは、信頼関係を担保するためにも、登録するような形がよいのではないか。

【委員】

登録制度がよいのはわかった。人材バンクとか地域クラブ活動の受け皿を募集する際に、どのような方法で募集するのか。

【委員】

まだ具体的な案としてはでき上がってはいないが、モデル校で実施する中で、制度設計されていくのだと思う。

様々な事案を考えた時に、その指導者は学校の求めている人なのかどうかについて、教育委員会は確認できないし、人材バンクの中でも確認できない。そう考えると、学校が信頼のおける人を、市に登録する形、繋がりの中で採用していく形の方法しかないのではないか。

他県の指導者確保の方法を見ても、具体的な方法を示しているものはない。モデル事業の中で、エビデンスを集めながら、北九州市での方法を模索していき、引き続き、教育委員会で検証を行っていただくしかない。

【委員】

来年度から、拠点校型のモデル実施を行うということで、いよいよ動き出すと感じている。拠点校型は、連携部活動の進化系のように考えている。

人材バンクを整備して、適切な人材を派遣するためには、3～4年ぐらいでは整わないと思う。10年ぐらいのスパンをかけて取り組むべきものであると感じる。

その間にも、子どもたちは部活動に関わっていくため、まずは、拠点校型で、現職の先生や退職された先生など、複数の指導者で部活動を支えていくシステムを構築していく必要があると考える。

教員は異動があるため、毎年、顧問を決めるのが大変である。今まで熱心にされていた顧問が異動すると、顧問の成り手がいないという状況が生まれる。新採に頼むしかないという状況が何年も続いている。拠点校型となれば、それなりに指導のできる方が複数人関わることができるよう体制を作っていたかないと、なかなか立ち行かない。

私は、拠点校で、チャンピオンスポーツを目指してもいいと感じている。当

該の部活動の目的や方針を生徒や保護者に示したうえで、チャンピオンスポーツを目指す。逆に、親睦を主としたものを目指す。方針を先に示さなければ、生徒や保護者はわからない。部活動に入ってみたら、イメージと違うということがないように、情報を出していく必要はあると思う。

【委員】

拠点校型は、吹奏楽部には難しいと感じている。どのようなやり方があるのか思い浮かばない。運営面では、楽器のメンテナンスの費用など、付随する課題が多いように感じる。

吹奏楽連盟としては、単体の学校だけではなく、複数校が合同で大会に出られるような動きはある。

【委員】

吹奏楽で拠点校型を実施した際、レベルの高いものを目指そうとした時、平日の練習がやりにくくなるのか。

【委員】

もし、吹奏楽が拠点校で、コンクール入賞等を目指すのであれば、平日は休み、休日だけ集まり、スキルアップを目的に拠点校で練習するという形が一番考えられるのかもしれない。

【委員】

土日のみになると、地域クラブになる。例えば、教員がNPOみたいな形で立ち上げたクラブである。「平日はしない」ではなく、平日はそれぞれ個人練習をし、休日に練習するイメージである。

【委員】

おそらく国のイメージはそれである。最終的に、休日は部活動ではないというイメージで考えないといけない。

【委員】

子どもが一番ではないということか。今の段階では、そこが繋がらない。

【委員】

これまでのやり方は、日々、子どものために時間を使っていた。このイメージを変えないといけないということはあると思う。地域クラブ活動は、平日の活動も含めてである。今は、休日というのが例として出ているが、休日のみ移行すると、平日も活動しないと駄目じゃないかという議論が広がる。

学校から部活動を切り離すことが今回の発想である。これまでの部活動は、教育活動の一環という扱いだったが、負担も大きいため地域の活動に移行するというのがスポーツ庁などの主張である。

【委員】

負担となると、地域も同じではないか。

【委員】

議論にあるのは、部活動は教育課程外ということである。教員の仕事として、分けざるを得ないというのも事実である。そのため、本日の提案は、子どもの議論と教員の議論との両方が盛り込まれている。まずはこの内容でモデルを行い、課題等が出てくれば、違う形の取組に変えなくてはならないと感じている。子どものことは考えてはいるけれど、子どもだけではないということも事実かと思う。

【事務局】

子どものことを考えてないわけではなく、子どものことを考え、より持続可能な状態を作り出さないといけないという議論である。

【委員】

子どものことを考えていないように聞こえたため伺った。

【委員】

今、地域ボランティアやスポーツ少年団の指導者の方、PTAなど、無報酬でされている。弁当もお茶代もない。一方、報酬をもらい、好きなことを教えることができる先生方もいる。話が合うわけがない。

ボランティアの方は、自分のことを二の次に指導し、「やめるわけにはいかない」と言われる方が多い。

指導したくて先生になられた先生の意見もある。その先生が、例えば休日を「報酬はいらぬから教えたい」というのは駄目なのか。極端な話、報酬はなくてもいいという方がいると、他の先生も報酬なしで指導しなければいけないから止めてくれって話ではないか。

【委員】

学校とは完全に切り離して、指導を望む人は兼職兼業の中でやってもらうしかないということである。

【委員】

この前のアンケート結果では、7割の方は、報酬があってもしたくないと回答していた。しかし、3割の方は、お金もらって指導したいということである。教員も指導できるはずである。

部費に関しても、お金を払えばいい。例えば、PTA会費として収めるとか、校納金として収めるといふ形にするとか、保護者が徴収する形にしていけば、お金の問題もクリアしていくと思う。

そして、保護者の方のお手伝い。子どもが頑張るのであれば、保護者は手伝いもするはずである。

【委員】

国の示している中にも会費制というのがある。しかし、いきなり会費制ではなかなか難しいため、モデル実施のための予算がついている。今後、様々な方法で検証しながら、会費のあり方についても模索するしかないと考える。

【委員】

拠点校型だが、例えば、門司区の場合、大里地区、門司港地区、新門司地区と結構わかりやすい。その中で、例えば、バスケットボールの指導者がいない場合、再区分するのか。また、部員が大幅に増えた時、再度分けなおすのか。毎年、変わるものなのかということも気になる。

そして、楽しく活動したいという生徒について、拠点校がチャンピオンスポーツを目指しているのであれば、それを選択させるしかなくなるのではないか。

【委員】

年度当初に、情報として提供しないといけない。それぞれの学校でどういう姿勢で部活動に取り組むかということを示さないといけない。

なるべく早い段階で、提案できるような形でのモデル実施をするしかない。不明なのはお金のことだけではなく、たくさんある。教育委員会しても、何とか子どもが活躍できるような形で実施しようとしているのだと思う。だからこそ、モデルの形で実施するしかないのは事実である。

【委員】

拠点校型になった場合は、平日も拠点校型で学校現場が動くことになる。放課後は部活動だけが実施されているわけではない。例えば、修学旅行実行委員とか、生徒会活動もある。拠点校の部活動に申し込むとそのような機会も失うと感じる。現場では、そのようなところをどうするのかという声が上がると思う。

【委員】

私は、部活動の指導をしたい。指導はしたいが、拠点校でしたいのではない。「あなたは合唱ができない」と言われたら、寂しくて仕方がない。指導を望む先生に、今通りさせてほしいというのは現場の声である。

【事務局】

まずは、モデル事業だと考えている。4割ぐらいがやりたいという先生がいらっしゃるため、兼職兼業も含め、活躍できるような環境は作っていかねばいけないと考えている。

【委員】

全教職員に、「あなたは、部活動に指導をしたいですか、したくないですか。」というのを取り、人事の材料とすることが必要だと思う。部活動の指導を「したい」、「したくない」を書けるようにしたらい。

【委員】

全ての学校が拠点校型になるわけではないと思う。大きな学校は、そのままになるだろうし、指導者がいるところはそのままでいい。指導者がおらず、部員も少ないのであれば、原則、拠点校型とし、連携部活動など、様々な形で対応するのが北九州市型になるのではないか。

【委員】

最初から全てを地域移行することは難しい。先生方でやりたい人たちを中心とした拠点校型を考えてもらえれば、最初はうまく進むのではないか。そして、だんだんと地域と連携していくような形がよいと考える。

【委員】

連携部活動ができるかどうかは毎年調査しているため、積極的に手を挙げていただき、先生の合唱部に引き入れることも一つのモデルとなるのではないか。その活動の中で、移動はどのようにするのか、お金はどのようにするのか、コンクールはどのようにするのかといった課題を解決していくことにつながると思う。

そういう意味では、連携部活動でなくても、事実、他校での活動に参加しないと機会がない生徒もいるため、拠点校型をモデルとして実施するのもよいのではないかと思う。

【事務局】

連携部活動は、少子化時代における対応として、昨年度立ち上げたものである。本年度は、昨年度より他校での活動に参加する生徒が増加している。しかし、連携部活動の制度を活用しても、今後、部活動が立ち行かなくなるということも考えられる。そのため、拠点校型を提案し、意見をいただいた。まずはモデルとして実施し、検証したいと考えている。

【委員】

連携部活について、本校も部員が少なくなり、柔道部が他校での活動に参加している。保護者の協力有無や移動距離もあるため、全ての活動への参加は難しいが、子どもや保護者は満足している。現実には、このようなやり方もあるのかなと思う。

私も部活動をずっと指導してきたが、今は教員のニーズが変わってきている。若い先生の中には、指導をしたい先生もいるが、そうでない先生もいる。先生方は、真面目であり、子どもたちが困っていたら、自分の時間を割いても部活を見ようとしますが、私たちの時代と今では、時代がかなり変わっているということも頭に入れて対応していかないといけない。

【委員】

部活動という名前があり、試合等が開催されるのであれば、当然、練習することは必要になる。できればモデル校でスタートする中に、始めから「拠点校型クラブチーム」という名前にして、チャンピオンスポーツには一切関係なく、みんなで体を動かすような活動もあってよいという気がしている。

中体連の試合だけで考えると、区内大会があり、合同部活動を組むには、どうしても区の中でとなくなってしまふ。そのため、少子化で立ち行かなくなっている種目もあるため、市内大会をオープンで行うことも検討している。そして、クラブチームの参加枠を市内大会に1つとか2つとか、分母によって設けて、クラブはクラブで予選をしてもらい、市内大会から出場するという種目も検討している。

先ほど、拠点校を設定する場合、区の中でという話が出たが、来年度からは気にせず合同部活を組むことができる可能性があり、拠点校型のモデルをスタートする時は、区の枠にとられない設定をしてもいいと考える。

拠点校型の設定については、どの学校にどのくらいの部員がいて、3年後、4年後どうなるかをシミュレーションし、拠点をどこに設定していくかを、熟考していただかないといけない。そして、拠点となる学校に人的な配置をしてもらいたい。

【委員】

本校も野球とバレーボールが合同部活動である。平日の活動場所は、各学校でローテーションしている。また、連携部活動については、保護者が送迎しており、意外と活動に参加できている。

【委員】

北九州市には、今、連携部活動と合同部活動のハイブリッドのチームが、6チームから7チームある。その中の1チームが、次の大会で県大会に出場する。このようなことを鑑みると、北九州市は、進んでいると感じる。他の地域の話聞いても、北九州市が一番スムーズだと感じている。今ある制度を軸に、モデル校を設定していけばよいのではないかな。

【委員】

中体連の大会について、令和7年までは決定しているが、令和8年以降は不透明である。

いずれチャンピオンシップの大会は、クラブや協会・連盟に委ねる時代が来ると考える。学校現場としては、そうなったことも見据えて、楽しく運動、楽しく文化活動にシフトチェンジすることも必要なのかも思う。

【委員】

拠点校について、平日は難しいのではないかな。移動だけで時間がかかり、ほとんど練習できない状況も考えられる。私は、自分が吹奏楽部に所属していた。また、子どもも吹奏楽に入っている。指導者によって、音楽の作り方は変わるため、平日も休日も同じ先生がよいと個人的に思う。先生たちの負担になることは理解しているが、子どもたちのことを考えると、部活動は、やりやすい、入りやすいものである方がよい。

上を目指す人は、部活動ではなく、お金払ってでもクラブチームに入ると思う。しかし、お金を払えない家庭もある。教育委員会や市が、部活動を切り離すというのは、残念だと思った。

【委員】

まずは、中学校で拠点校、その後、部活を指導したい教員を抽出しながら、スムーズに移行できるように制度設計をする。また、指導者が不足することも想定されるため、その時は、外部から指導者を提供する。この会議で議論してきた部活動地域移行という大きなテーマの順序が見えてきたと感じている。

【委員】

まだまだ課題はあると思う。今回の意見を反映し、次回の提案を受けて大枠としたい。最終的には、保護者、生徒、学校職員等に説明できるような準備ができれば、部活動地域移行を進めることができるのかなと感じている。

【座長】

以上で、本日の議事を終了する。